



物草考即 二

^13  
4269  
2



八13  
4269  
2



物草太郎卷之三

第三回

老臣 諫主君 死忠  
壯士 見寛鬼 卧病



却説長村右兵衛尉と出陣左府の飛圍めまかり  
見奉んと請々終に義民官壯士基前小出と有  
て張越知女時境左府と酒多あ張設け美人女  
聚免女樂代ふとめ歌舞吹弾に酒を無の敷を  
つとみ高興ふとつりし右兵衛尉が来りし  
間と尋思ふ常より骨鯉の尻ありて此景光  
成見は決して諫言成るべしと十か子威を張る傳成

本誌  
義典  
刊  
可

91-2147



右兵衛尉  
忠諫  
命代  
碩圖

今らんと親隨のちめ命じて右兵衛尉と名づるふら兵衛尉  
尉甚る前ふ出て持伏し、決雨の如く下り、哀し  
咽ひきくふ左衛門尉と名づる、作那の鳥に直徳地延哀  
也、あふふ右兵衛尉頭、成始く後成、この直徳も  
今隣郷は兵衛尉帯く人と教へ、このあり、自己  
ら、成、見、後、容、て、聖成、狂、暴、ら、う、と、聖、安、ん  
尚、父、兄、カ、成、挺、く、人と教へ、このあり、驚、疑、浮、泣、ご、う、を  
扯、信、ぐ、如何、い、う、と、い、上、法、あり、人と教へ、このあり、又、其、命  
成、喪、之、い、は、り、君、今、春、侵、度、さ、く、横、暴、成、志、し、  
酒、も、よ、溺、を、自、ら、滅、云、と、ま、の、死、終、り、片、馬、上、長

ま、ん、や、古、う、り、上、成、犯、下、と、雇、い、お、の、と、一、個、の、葉、  
碗、の、亡、び、う、教、さ、り、一、丈、君、尊、く、臣、卑、く、上、下、分、定  
ま、ら、天、の、道、を、り、倘、ら、ま、ら、ふ、互、と、ら、い、私、の、幸、さ、り  
一、室、の、中、男、さ、り、女、卑、ら、さ、定、理、す、り、牝、雞、晨、と、  
教、の、家、の、亡、さ、り、今、君、の、威、權、帝、の、上、ふ、あ、り、と、徳  
と、修、め、ん、酒、を、小、洗、面、し、壁、長、倭、奸、邪、曲、の、後、成  
愛、し、横、逆、と、事、と、自、ら、滅、亡、の、祐、を、た、の、と、祖  
成、の、朝、祀、成、廢、絶、さ、り、た、す、ら、ん、と、い、愚、の、甚、く、た、の、成  
ら、成、ぬ、ら、り、終、さ、く、義、ぬ、く、只、を、食、の、と、成、果、と、り

倫理と離るる禽獸もかきまうと記す。畜教はふ  
もろは代々主の恩とある君累世官秩高く安  
富する業は教と皆上の賜ふらば其重恩と忘却  
し臣節はうしむひをよこす畜教もかきまう  
行跡より主人よ君父師の三恩ありこの三恩を教と  
と知る人の道よりこれなれば人面獸行より君三恩  
俱う棄し終り願はば當に悔ひ自ら艾を善く遣  
了終り臣よも眼目とく尚改むらんば自他孽  
注ぐらば天誅逐ぐら減亡遠くは汚名を後世に  
傳へ祖先を辱め終るべし今君の業をたすむる六

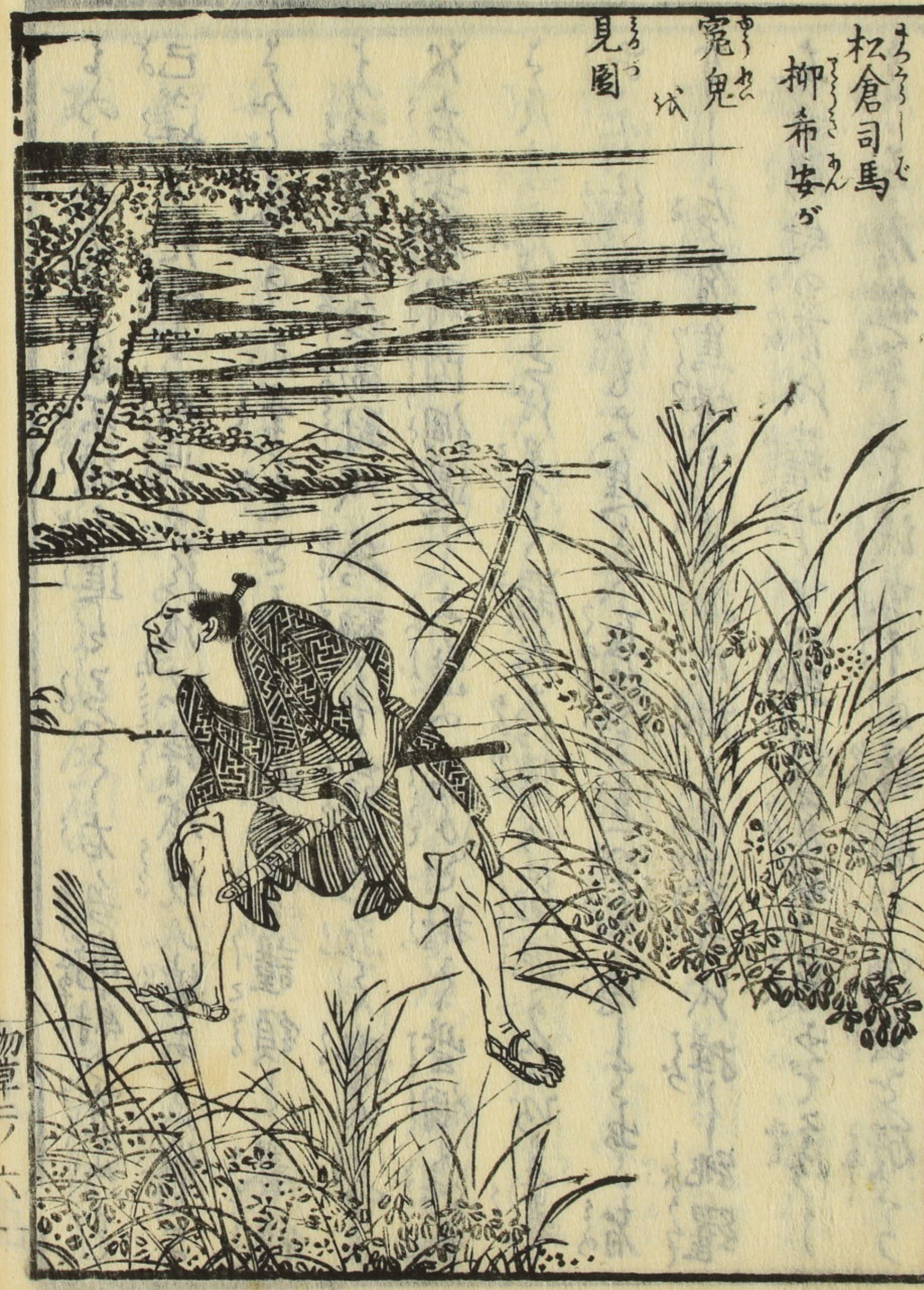
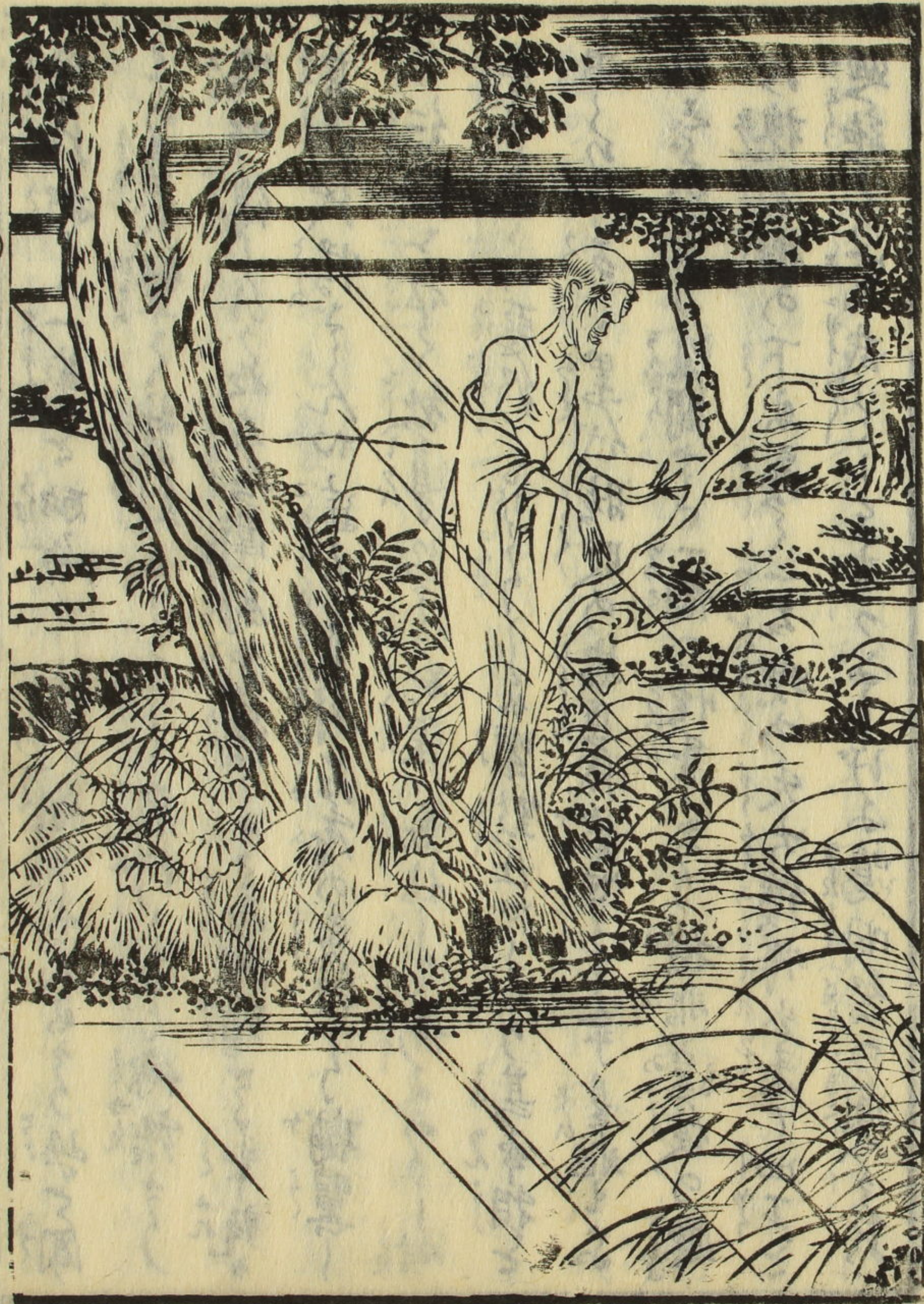
勿草ニ

減亡は樂しむ終るなりと悼むるならく直練とす  
るふ左府は依りての並居る信長等針座は座  
頂門上針伐刺がごとく一層きけ掃興と見えは  
左府勃然とて大に怒り你誠は忠伐かむら  
客に諷諫をもとむる表伐とくは針練をき  
して臣は教の道よりこれなれば己物より教と主は  
過代許す愚らうとて又畜教も及ばず罵る你  
君臣の禮節いばくある借といすむら殺  
おすねも老悖の痴話より収看よとて今  
日も故去よりこの以後面前よりすて終起と

吐し退きふ右兵衛尉頭茂拍起こは行き言と  
聴給ふものふ臣死懸考らるる云も此公の明  
かり臣言ふ正云たり病語あはれ臣君の意  
と干す罪にじと存意思破れ可く一命  
取らるる其死を償ふ欲するふより臣が諫言用ひ  
て後使に死とも九泉の下より歡喜と爲し備用ひ  
給はれ生て君の滅亡代見したるは死に連る死  
ふきの代も死に起るともふと左府眼張いりし殺  
重く主小對し無禮の言代吐くと奇怪やう殺  
あのか草打翻と令とるふ左右の辺長死して對ふ

初巻三 五

とももりうらふ不破と進とるる右兵衛尉の直め  
己が好し死んて正と考代は時代視ひ罅あはれ  
とんと毒あふふ業をさと逐ると死とる謹領と養務  
より捷も右兵衛尉代拍翻して府見とみく斬ん守  
次右兵衛尉門個過しと進の右よと拵と些個も活物  
とん左府とる代見と悪人老徳の縁拒うたは是奉  
おしと洵氣も大進と直徳とるは氣憶とる出る者  
かし左府魚燻と長押に掛し眉尖刀代押し跳躍  
右兵衛尉の首代難せせと就地首を前まで居り  
より左府徳をとる没あふと拵と酒興と解とる



松倉司馬  
柳希安が  
冤鬼  
見圖

物  
二  
上

席代極く一巻と融會し別處へ入りて此と聞  
この員代聾く葉射ぬまきりて悪行をて低語り  
嗚呼傷ひく如右兵衛射を練しとるが頑で半乾  
其の気情さらんか這たき射を右府の力持より輔翼し  
て仁義をぬく教導するが原が勤仕して側より時  
きくさるの要りもかきりしめ準致仕せしより其本相を  
おろしとる累代眩取の忠臣が害せし事其非もあ  
たきぬらう近間中へ一個の怪事あり檢非違使の廳  
に槐木樹の下に夜々一土塊の火火鎖將出来て四下を  
廻絶く寛哉とくともうやげふ鳴咽聲の聞へる

這夫を伏見しとる濃烈とて一陣の冷氣に侵され  
て肌骨を寒し病に外ぬ檢非違使の下司お松合  
司馬とて一個擔力の士ありて是代圖て見ると此  
裡の怪代做りのたんと腰に宝刀代挿し銅燈を燈り或  
夜の槐木樹の下に到見えよ夜々四更さるんや  
と此比おの一陣の冷氣に吹来り濃烈とて肌骨  
が寒くも毛髪をか堅くして司馬宝刀挿て用目四顧  
てひく下へ忽と一土塊の火火鎖出飛射り寛哉とくも  
怪く幽くして廻絶くして司馬とて睜着眼てやわれ  
疵裡に怪と做らん連よ本相と露出るんと怒りを教



あつた天火俄尔も昏く暗くして消えりつ司馬と別よ  
懐車もあらんし代握り居るに一陣の冷気  
我控まると肌骨が侵透して毛髪もふるにさても  
の司馬も冷氣が逼る戦栗して立居りし一陣の冷  
氣にはまゝ一個の人面蒼瘡てやとて快なるもの司  
馬の前よまゝり氣喘ても若くげなる聲して某の動海  
國の賢人抑希安しと云ふなり君定て聞給ひぬらん  
某往ぬ罪もくして縲紲と交えられた罪命の死候も  
冥路よ流轉して寛の罪も沈む迷ひの雲晴る時なり  
此事代告すく致し夜く出く人候もふぬ末もやや愈

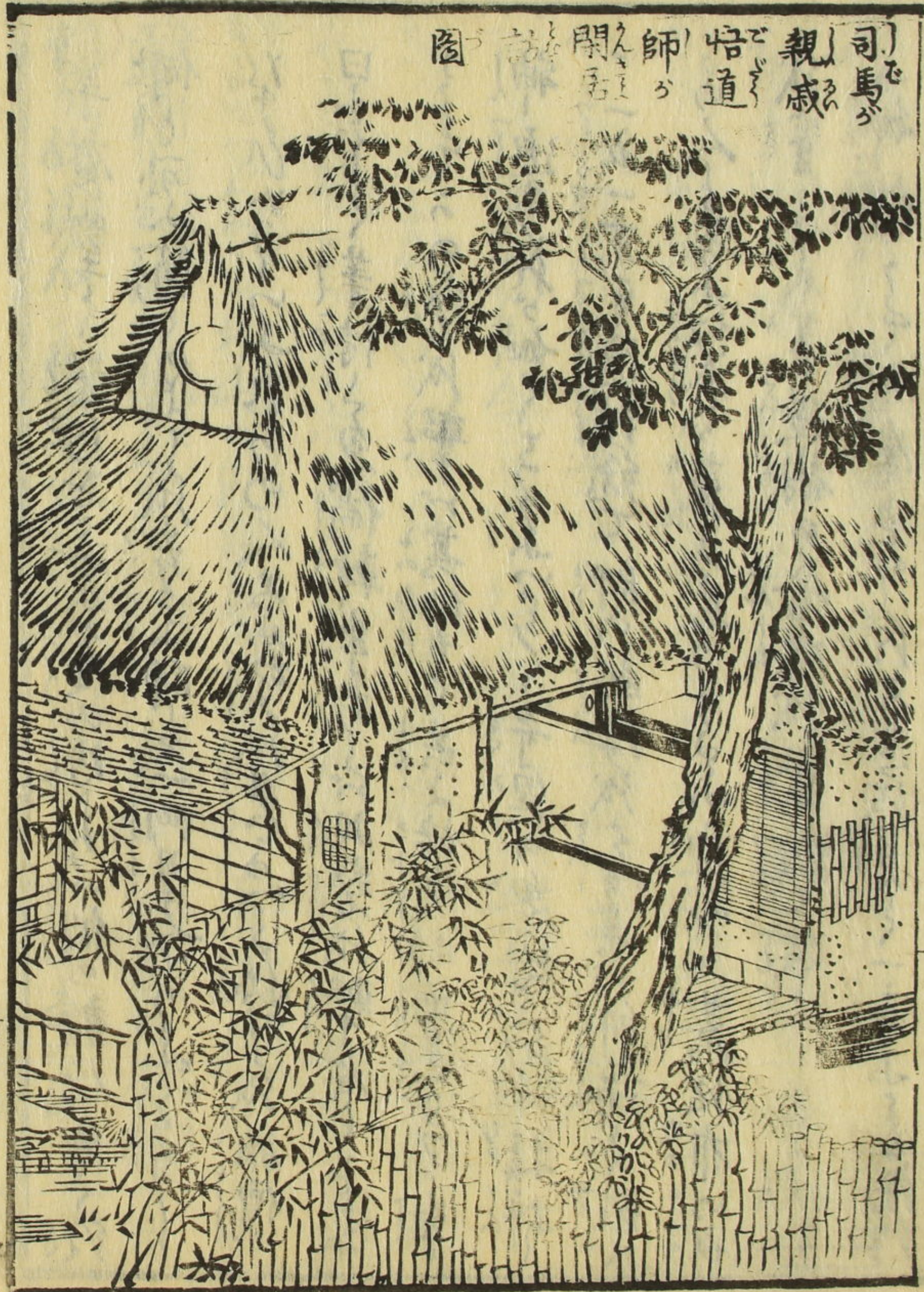
如草一八

逢異なりて人皆害怖て迎く結ばん今君も遭く我  
居代候るく代得り願ふ君我竟と書ば冥路の者  
鬼と板山の某代殺害ありしも左府の御業ありと  
り衆出り代事とせよと散りたり司馬も夢のさ  
しぐらぐらに然とてありしが始り人をばこそ思想る  
る樂代親書りしも左府の御為なるかと驚惶け  
る備の言に外に余の族を刑せしむと深く隠  
す人ふらうとて過るるが身りるの天火と出已らう  
らん却然司馬も寛鬼の死あり給はる思ひはしむも備  
此事我らり流るる當時威権の左府も是れ事よ尋

殺害すもん事代馬也等用は是せり一は病法  
度よ部一時柳希安が寛身幻身見ぬく囑託  
昔一車代敷くも司馬と志すひは病市くるが箇  
物の纏纏住くる光景ふるふより其病間あつたに親族これ  
又詰問は司馬今とけはむ夢の比一五二十と詭統よ  
よくたぬおの惶ぐるが左府の威権重るは此事力及  
たぬる半やんさつとて司馬は見殺せんも便らり  
たぬが一人の白北山の辺は草庵結く道徳持てる悟  
通神と云一個の聖人あり往々哀告は仁恵は登願と  
来り板橋んと終ふ皆此縁は同一一人潔奇とて此の

草庵に至り草庵と云ふ庵の内より一個の雜僧出で  
何と可い箇のよは成者より師と一兩日まゝりふらり  
はすひぬくつたらの人たぬ妙は成者より師と一兩日まゝりふらり  
曰くよく等待するは備執事ありは此聲は撃をく  
すもこの聲は撃は其響も其も悟道師圓身する事  
神通ありは如くさうふらり奇異の思ひさかし接待  
一五二十元隠括統て師の相活成をさすは師諾くは  
の人と云ふは倉が芽は有りくるふ身や荒れ布の衣  
代穿るは菩提樹の念珠は繫飄く然り一は伏見  
あ神僊くは凡庸ありは一は日見く一はふらり

司馬親戚  
悟道師  
閑話  
圖



卷八十一

白圖

愛州山下

日從茶葉起

修葺總不深

心

白圖



の男おとこのさふし病者まがひの枕まくら込こ緒いとくさるしるる師しの痛いたむむるる身みのままま向むかひひ合あわわすすてて口くち裡に經へ説わつつのの要よう文ぶんをを補おぎななすす終しまつつ乃すなははちちのの場ばどどととららく

佛法大海

生死一同

惟信悟入

本來皆空

時ときめめららばばもも虚こ空うままととももななららずず勢いきよくく今いまありありりががやや尊うんんのの心こころをを教しめめよよりり生なままじじのの羈こ絆き代しろ脱だしし永とこくく冥めい路ろのの流なが轉まじじとののぐぐとと成なるる佛ぶつ特とく達だつのの身みとともも亦また社しゃ喜ぎ地ぢとと陣じんのの風かぜ派はいとと吹ふききよよとともも病ま者が素もとよりり内うち傷やぶのの患あはれれああつつたたいいりりがが終しまつつ就すなははちち爽すま然ぜんととてて日ひ成なるるはは後のちとともも甚ただだ疾やく瘥ちやうくく遠とほ近ぢか師しのの徳とくをを傳つたへへ補おぎななすすははたたししめめるる

物草三十一

第四回

奸妻 縦欲貪黄金  
貞婦 守節伏白刃

古人こじんもも悲かなししとと生なままじじ別わか離れししりりののままををかかししりりととままりりままりりままりり易やすくく生なままじじとと戀こひのの情なさけすす刻ときのの間まももゆゆめめ遺あららせせるる事ことああららずずはは右みぎ左ひだりののまま人ひと阿あ蘭らんのの君きみもも右みぎ左ひだりののまま人ひと阿あ蘭らんのの房むまのの密ひそ聞きはは涙なみだのの珠たま袂たもと代しろけけししぬぬれれたた枕まくらのの巻まきももくく人ひとおおくく小こ間ま睦なごみ目め夢ゆめ路ぢもも君きみおお居いまるる在あるる遠とほ国くに浪なみももくく船ふねおおくくとと渡わたりりのの子こ拂はら曉あけのの風かぜ身みももままりり醒さめめ今いま將まさ女めのの身みももああららずず聖せい女にょのの身みももああららずず聖せい女にょのの身みももああららずず

のうらみまじりてお歌空よ鳥乃翼は羨み水を濛濛の  
曉は終る只朝暮休渡の舟乃くくは船かこころのい  
ふおがわの船路りまじりて見ま

越ゆる通の厚かして君の玉章うけてまをりし

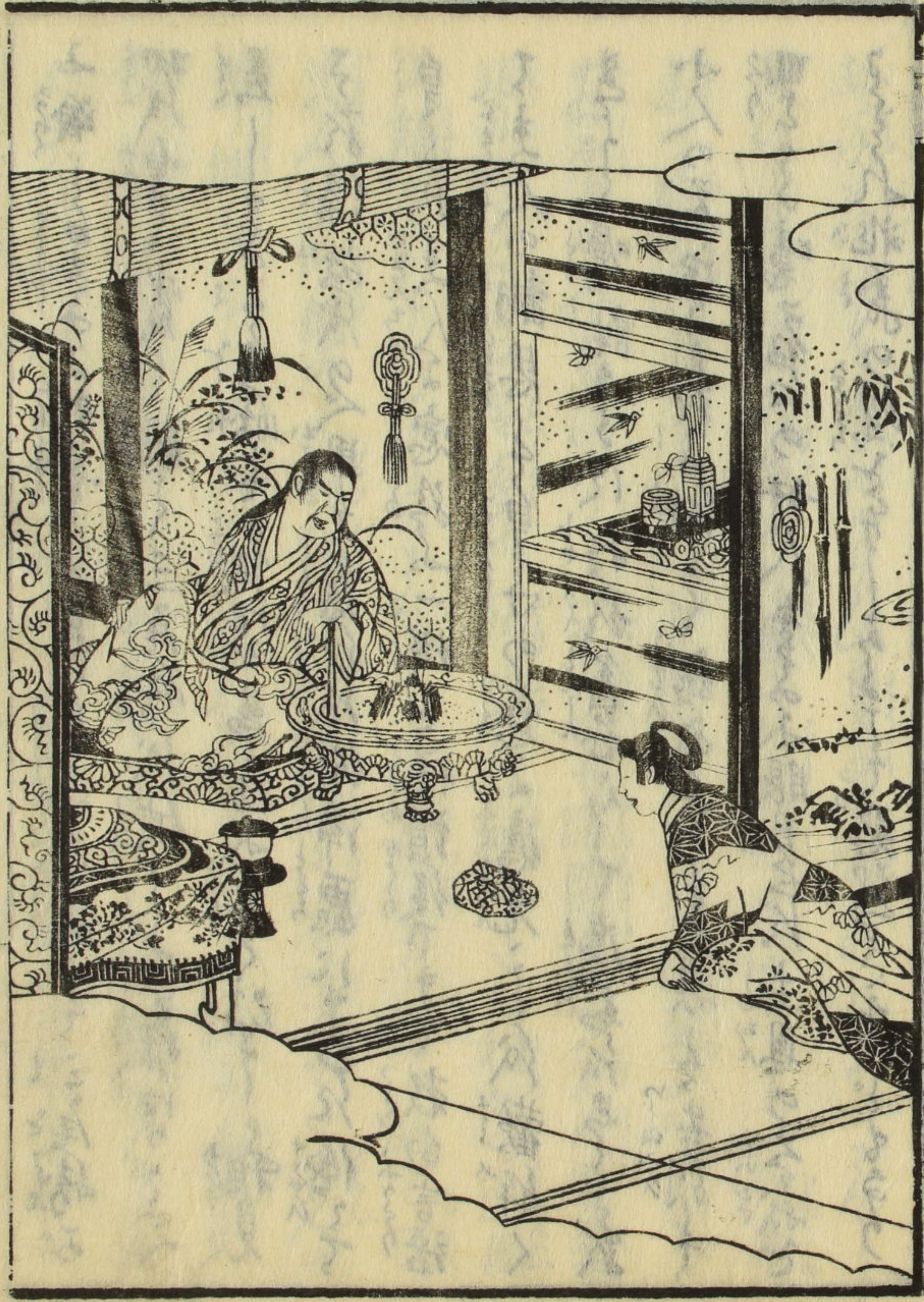
流く流くもいづれやうり却況這君標致備きた花香  
柳翠あしく純世の佳人なり其と絲竹の調まじり  
あけり和歌も古く通衣昨もかやあめまど判給  
せの名人なりしが長岡のまよ過ふ糸情水塔の親  
まのらま風帆く吹送る幕の翻く問う君の波  
ま成見てま深く其影もふ迷を辱国風

能持く其代通はまも箇君貞節の婦人ありて  
まあめ難小管待給ひ小皇子怒り物く而も  
あねよくは怒り物に宇治の右府右府を謀り  
寛小衛とん長足の子よ流瓜告うらにまよいの  
は困れ君の怒もふを神もれまめく我堂中の物  
りて透即右府の偶耕して不に右府瓜謗害し今  
も忌憚りまらりて七十三半由は稠結くまもま  
真心金人のまらりて意凜如して干べうばまも  
今も計較はまらりて或を怒りあひの怒我くまも心  
はくまらりて能合まらりてま物もまらりてま

よ十一個の貞心は我よき剛腸を動かすや  
いし是れ心はけらぬ今一曲猶ほ備心  
後ぞ一否と云を刺殺して憤を教へん  
子の侍女三尾寄し女皇よふ向く臺前の憤  
後ぞおほいし道つらき横暴つらき傳言  
妾が姉妹の親睦をよき縁に女あり渠橋  
およやく傳言の任ぬ居り渠奸才ありて財を貪  
し様の巢成しむらふ一般妾渠の貪を甚し  
悪て交と治めし如今も財宝とあり渠  
絶し其生前の仰攀流の軒迅速は清ら

物草市ヤ三

身根中り較計代儀多きよ子業成極く又  
依之我女子を居りし尾寄に圓金百兩とよ  
多き尾寄入書し得く縁は簡勝をさう  
多しは向く護書匣は緘ど扱ふらに縁は  
女連のやりを思ひ折開よこの金書子微傳  
皇よより贈りたる其軒の情願を信回  
りし縁はけらぬ女皇の分別とよ  
盛の縁はけらぬ女皇の分別とよ  
よきドけりし女夜とよ  
返事して使成婦しる三尾寄と書成見し討已



王子侍女  
橋家の傳冊  
以賺さん  
話小圖

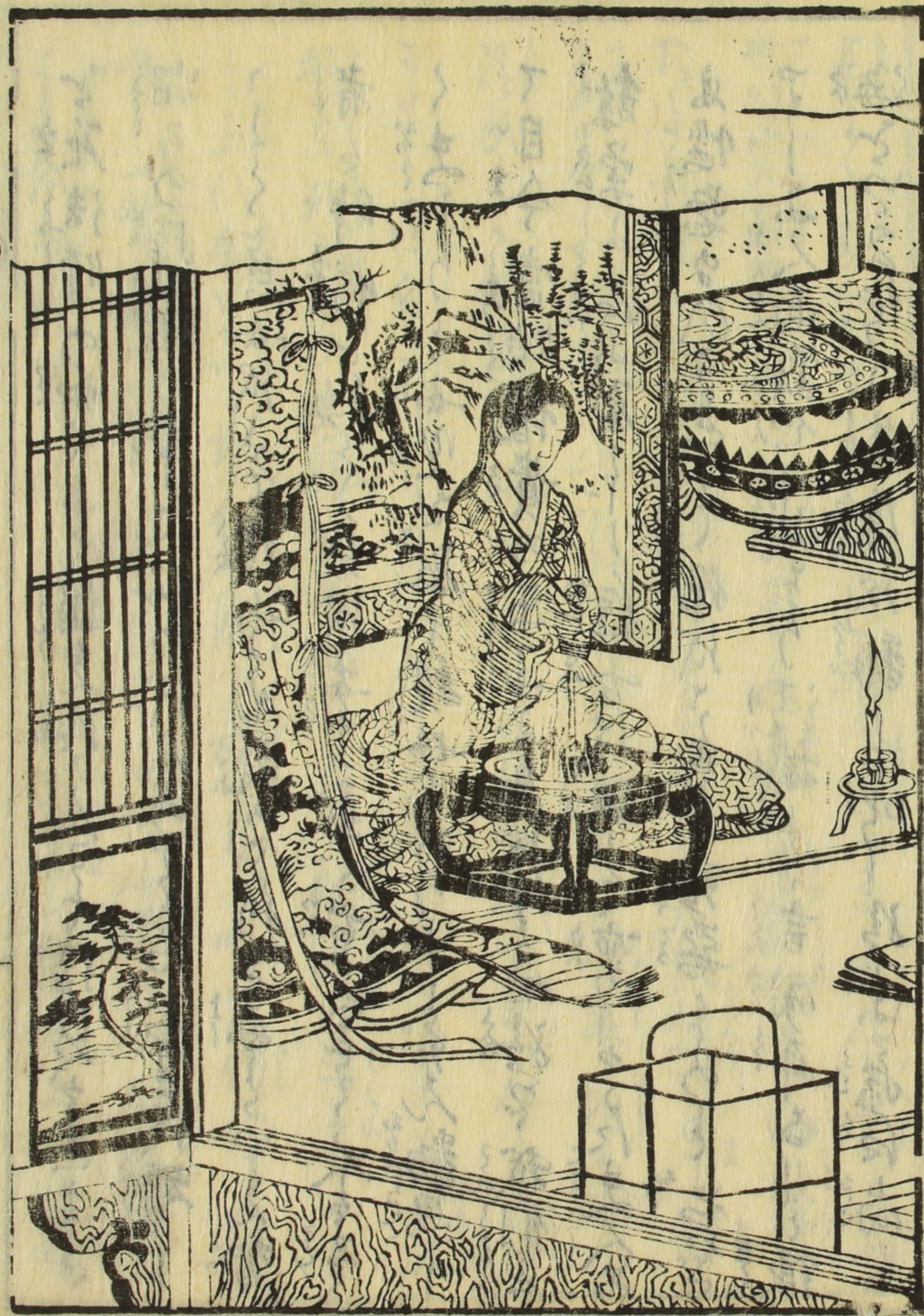
小海より白き子に報告しきまじり白皇子を雀躍して三尾崎にお  
功代尊く賞し賜く三尾崎代使して三尾崎にこそ  
差しきる三尾崎を三尾にがめ居ふ至るひく相見  
さる縁故代のみ畢して三尾に代僻淨慮にゆいた修て  
皇太子は夫人の意ゆふ一件と後頭後下まで教言言語  
て夫人の翻思して皇太子の意に應允して代歡解く  
まじり囑託するに私私負心ゆして廉恥代を告別して  
小人の居にさるる細く謀ぬまじり三尾崎を告別して  
圓きる噫る三尾の奸人まじり小眼見のん主恩のまじり  
まじり北義の謀をまじりしるるこそ惡むまじり

却て三尾に三尾代さるる白皇子の囑託代玉成さん  
思ひくる時境雨夜の徳意侍女たちあつたりて千枝  
まの道更さるる夫人まじりまじりまじりまじりまじり  
三尾代入るるまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
迎ふらるるまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
よ謝居たりてまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
夫人ら兩個のまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
草紙まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
護護まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
人らまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり

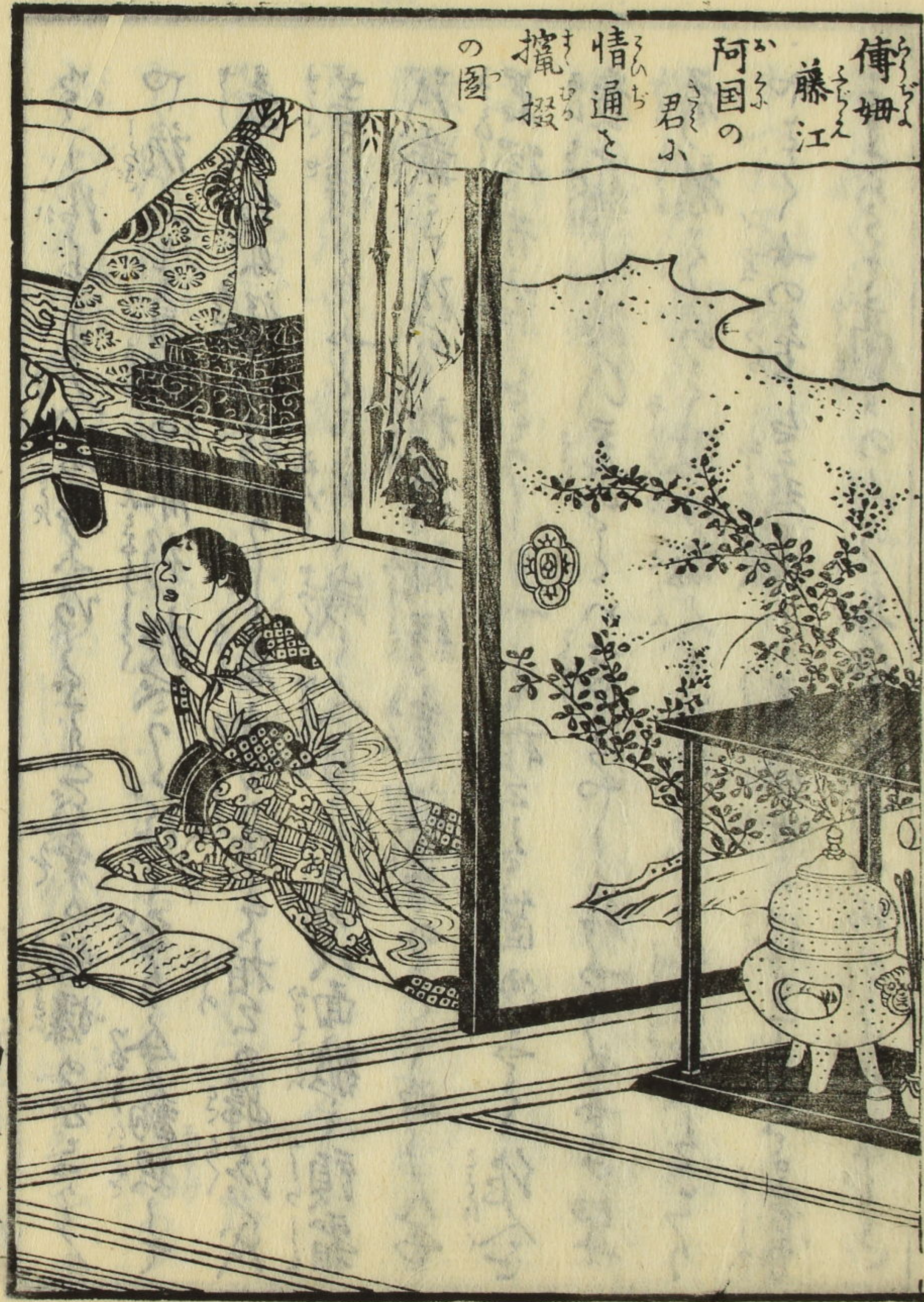


中をぬく今夜と更深夜まき明のつらさかきめこの  
ました孫に高も藝する言代将く不王子の事  
件代つひ出く作成とすうたさうまの主人ふお怒り  
流の面に勢あうげ任職よる像護瘻くそ強き  
きと想うぐ押班老媽の其うささばさう一玉に  
獻諫ももまある身ふうた鳥晦氣くそ言出ぬる  
くそ自代女と欺凌く故さうぐく夜のくそ人もあ  
ぐそバさ怒めぐく付後と厳とたりさむるくそ何  
くそ代孫に泣暖く妻君のくそあはさくそ情ある  
寛家も随也孫くくそせさうあ何は自代女くそ

形く流くも人本石ふりくそさく辛く奴嬌の公さう  
や流ふも貞烈の亂行致さうぐく今翻思くそ  
まがくも後ひ孫くく君寡居くそ相公の婦洛代  
等待くくも年く歳く人同くうく水面離く頭霜  
代戴く孫く相公の綱縲豈代半のくく流く人か  
若獨若若節さうくも相公と箇沙さく作念  
まの流く孫ひ君のくそい志まやく孫くめ女子早  
前顔くめく改く敵人もひくく先の感くさうり  
やとく女の香く表易く君今世は孫くさうる客を  
あさくも高くの人さく悲ひくそせさう先のくさく



傳  
母  
藤  
江  
阿  
國  
の  
君  
小  
情  
通  
と  
攬  
撮  
の  
圖



と死法師の如くさく消え去らんそて情なきはす  
相るの掃落の事は何の代もあやしく白き尻  
くまの直女成りて終ふとも誰うも情を好むらん智  
者も時情をなしく身成事さす古くも人なき  
くまのりりと女児を思ひ親母もありしを人翻思  
て目今當路權貴の王子も身成事せ終る我れ  
餘業よ泣かばなしく悔言成飄と稟くた主人  
ぬ惚惚のひるさすぞ恨成さぬと悪惡とのとさ  
あし人面獸心の賊をり汗撒く言詞身より報  
海さつるをり米厚衣翻つて叫び終るは白尚も

君の如く悲しくたすく病成さく思はるが主人を忘る  
母の寛藤子とてそとてあやめおかし別離と海波漫  
たる舟跡とを思ひ相見しとてさうり目下婢  
まはさず不欺遠くづりめさすまよと涙井泪の  
影ひしが備生く此と意も我れ何辱と交んる料  
がし一傑白とせしと直心もさすさすをさす刀成  
握く北よ向ひま帰ると二世も我れ恥成ば事果すと  
そよひ命もさしおんし佛も共よ自ら嘆成刺けし  
呀し一聲ぬの霜とさえ終ひる侍女們と正睡熟  
こよ成りたおきおよ乃とる光景成見くさす慌惚

慌智て何の馬の自屠るやと急忙ぐ押班老媽の  
るに報告ぬるに此の園くく驚きたりと奸女  
お智のともぬるに春く胸成やとめとあめ  
て假く倉惶氣借しき隨即と帯跳きて屋首さ  
くめら何おの生害するや平常心下らん稟性ある相  
公のこゝれ思慕まひあけられたるをし給ひめると假  
哭涙はるがたよ侍女們も個々袂とぬりしきと  
奸才のなれしはる遺書さくもあはる身の跡しりしと拙業  
お身辺の文匣は一紙の書ありきと人さした懐きて  
よ火お焼くしと流ありと箇一件とさるるの流しとよひ

詳細に伝はるに聞くとお望みはるの力成るる意  
阿國の君古く希なる貞烈なれりとの流しとよひ  
今もその詩に流るの婦女もこの流しとよひ其操を身  
城南鳥羽の郷に戀塚とて阿國の君乃墓墳ありし  
が年古く戀塚訓とれたるより鯉塚とあやまり後冊  
附會の説とるに又お望み御前の碑も戀塚の君ありし  
同じ鳥羽の流しとよひ二個の女子貞烈相同く楽伯の  
の安離と墓墳はるしとよひ

